

今江潟を偲んで

川本 富美子

私の祖父は、今江潟の漁師であった。もちろん小さな潟であるゆえ漁のみで生活はできず、潟際の田畑で農業も営んでいた。

幼少のころ祖父の家に遊びに行き、今江潟で泳いだり、祖父の小舟に乗せてもらい漁に出かけた思い出がある。前日沈めておいたチャンポと呼ばれる竹筒を引き上げるのである。チャンポの中には大きなウナギが必ずといっていいほど入っていた。時には2匹入っていた。そのウナギは大きな竹籠に入れられた。ドンベカゴと呼ばれる籠をのぞくと、ウナギが何十匹もぐるぐる元気良く回っていたのを思い出す。

祖父は戦前から、捕れたウナギの殆んどを今江の料亭（『長平』や『番清』）に、残りを小松市内の魚屋に卸して生活していた。が、私の記憶のあるところからは、孫を喜ばせるために採ってきたウナギを目の前でさばき、秘伝のタレをかけ、囲炉裏で二度焼きし、おやつとして出すのを楽しみにしていたようだ。今もってこれよりうまいウナギに出合ったことはない。

残念ながら今江潟はもうない。干拓によって完全に姿を消してしまった。干拓地は水田のみであったものが、ここ近年は転作作物のダイズも目立つ。中央を加賀と小松を結ぶ幹線道路も走り、交通量は年々増えている。干拓地もだんだん姿を変えてきているようだ。今江潟は加賀三湖の1つである。古くは日本海が深く流入していた地形が、砂丘の発達によって海水が封印されてできた潟湖（ラグーン）である。南加賀地方が「江沼の国」と呼ばれるゆえんである。海岸線が後退して最初にできたのが木場潟、次に柴山潟、一番最後に浅瀬であったところが外海と遮断されてできたのが今江潟である。今から2000年前のことだ。つまり、加賀三湖の中で一番若い潟が今江潟だ。水深も2m内外と浅く、そのことが今江潟の悲しい運命を決めてしまった。低湿地帯のため、たびたび水害の被害が出ていたこともあるが、戦前戦後と食料増産が叫ばれた中、農地確保の標的となった。

昭和27年、ついに加賀三湖干拓国営事業に着手した。昭和29年、まず水を直接日本海に放流するために、柴山潟から伊切海岸に至る新堀川を掘った。昭和42年より排水が始まり、今江潟の全面干拓（238ha）と柴山潟の約6割（576.2ha）の干拓を



「今江潟でウナギ漁をする祖父」
昭和38年頃 -

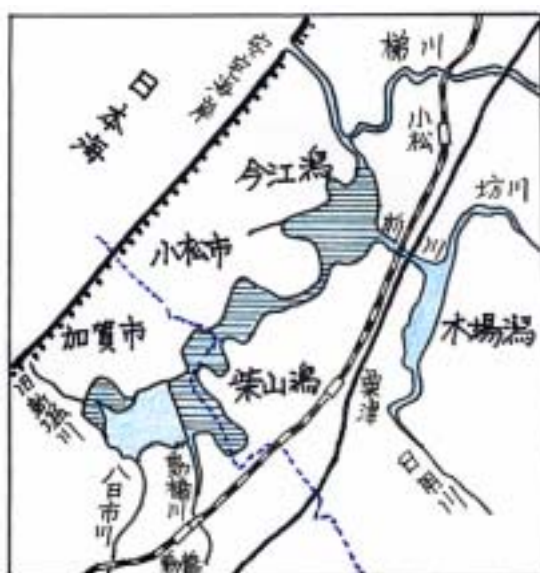
し、昭和44年に完成した。そのころすでに米余りの現象は起きているにもかかわらず、高度経済成長の中、今ほど環境問題がクローズアップされることもなく、干拓事業は着々と進められてしまった。

今江潟の喪失と同時に、皮肉にも減反、転作、米飯給食の推進がなされたことを考えると、その水産資源・自然環境の損失が一層大きく思われてしまう。

さて、かつての今江潟にはどのような生物たちがいたのだろうか。今江潟は三湖のうちで唯一の半かん水湖で塩分が3.3%ぐらいあったという。ゆえに、他の2湖と比べ、多種多様な魚がいた。(1)湖底に一面産み付けられた卵で油断すると、すべて転ぶほどだったという。水性植物も豊かなものであった。(2)その他、貝類、エビ類、カニ類、両生類、カメ類、昆虫類等、いろいろな生物が記録されているが、とりわけ、鳥類の記録で特筆すべきものを次にあげておく。(3)オオハクチョウ、マガン、ヒシクイ、クロガモ、オオミズナギドリ、アビ、ウミスズメ、コウミスズメ。

現在の木場潟ではなかなか見ることのできない鳥たちも来ていたようだ。私の祖父は若いころ、今江潟で桃色の大きな鳥を見たという話もしてくれた。トキであったと信じてならない。今江潟の排水が始まる2年前に、祖父はドンベカゴを洗っていて竹のトゲが刺さり、破傷風で亡くなった。干拓された無惨な今江潟を見ずに済んだのは、せめてもの幸いと思っている。加賀三湖干拓計画は国家予算の関係上、途中変更され、木場潟は外された。カヌー大会でアシ原が刈り払われたり、周辺歩道整備など課題も多いが、干拓工事から唯一難を逃れた木場潟の自然を私たちは守っていく必要があると思う。

注:(1)(2)(3)とも「今江潟と今江町の歴史(川 良雄著)」を参考にまとめたが、現在使われている名称の一部改めである。



干拓前(昭和27年以前)の加賀三湖
≡ 線部分は干拓埋立地

(1) 今江潟の主な魚類

淡水魚

魚名	方言	備考
コイ フナ ナマズ ドジョウ ウグイ ニゴイ モロコ ヒガイ タナゴ ワカサギ ヒメマス オйкаワ カムルチー カワムツ チチブ カジカ ヨシノボリ メダカ イトヨ テツギョ	オゴイ ワカゴイ モロコシ ヒコ、ヘコ、ヘコタ アマサギ ライギョ アマゴ ダンクロ グズ ゴリ メメジャコ、メンメンジャコ トゲウオ	ヤマトゴイ(明治30年頃移入)、地鯉(在来種) 銀白色、黄色、黒色の三種 タカノハドジョウ、ホトケドジョウ、シマドジョウなど ハイカラモロコ、デメモロコ、スゴモロコ、タモロコなどの区別があった 明治30年頃移殖 ヤリタナゴ、ゼニタナゴ、バラタナゴなど 北海道から移入 中国原産、片山津で養殖が逃げ出す フナと金魚の雑種、昭和40年頃発見

半かん水魚

アユ ウキゴリ ビリンゴ ハゼ イシガレイ ボラ メナダ イトヨ、トミヨ スズキ ウナギ カワヤツメ サケ マス マアジ サヨリ サツパ シマイサギ コショウダイ クロダイ ヌマガレイ ダツ シラウオ コノシロ コバンザメ	カワギス カワガレイ 備考参考 アカメ、アカメボラ、 ハリサバ ハネ サケノイオ ハシクズ、ナグリ シマダイ コンモリダイ カハダイ イシガレイ シラス、スベリ マペラ コバンイタダキ	ツユゴリ、スナゴリ、イササゴリ、カリカリゴリ、トラゴリ、スベゴリなど コボラ、コチョコボ(1年生)、2年バイ、2才(2年生)、3年バイ、3才(3年生)、シマワリ(4年生) アカメゴ(1年生)、タンチアカメ(2年生)、ムギワラアカメ(3年生)、サツキアカメ(4年生) 明治24年から放流 昔は相当数捕れた 群をなして水面近くを泳ぐ習性 5~6月に潟に入り、10月に成長して海にもどる " 5~6月に潟に入り、1年生は10月下旬、2年生以上は8月に海にもどる
--	--	---

(2) 今江潟の主な水性植物

科名	植物名	科名	植物名	科名	植物名
ゴマノハグサ科	キクモ アブノメ	ホモノ科	アシ マコモ オギ	ヒルムシロ科	ヒルムシロ エビモ ササバモ ヒロバノエビモ
リンドウ科	ガガブタ	カヤツリグサ科	フトイ		センニンモ イトモ ヤナギモ リュウノヒゲモ
アリノトウグサ科	フサモ ホザキノフサモ	トチカガミ科	トチカガミ クロモ セキシウモ ミズオオバコ ヤナギスブタ	ガマ科	ガマ
アカバナ科	ヒシ オニビシ ヒメビシ ミズユキノシタ	オモダカ科	オモダカ ヘラオモダカ ウリカワ クワイ(栽培)	アカウキグサ科	アカウキグサ
アワゴケ科	ミズハコベ			サンショウモ科	サンショウモ
マツモ科	マツモ			シャジクモ科	シャジクモ フラスコモ
ヒツジグサ科	コウホネ ハス(栽培)				
コナギ科	ミズアオイ コナギ	イバラモ科	イバラモ トリゲモ ホツスモ		
ウキグサ科	ウキグサ アオウキグサ				